

CONTENTS

2-3 国連子どもの権利条約 批准から 30 年
天使のつぶやき、法律に
——こども基本法施行 ユニセフも歓迎

topics 寄稿

4 子どもに優しい空間、モノづくりでアートな時間
〈作業場〉@旧今宮小学校 訪問記

活動紹介 No.39

5 ウォークの楽しさを伝えよう
——初のフォトコンテスト実施

活動フォトニュース
6 春の定例イベント レポート

8-1 ユニセフセミナー大阪 2023
開催のお知らせ

8-2 チャリティウォーク フォトコンテスト
入選作品紹介



ソマリアの給食センターで重度の栄養不良の子どもを抱くオードリー親善大使 (1992年)

国連子どもの権利条約 批准から30年

天使のつぶやき、法律に —— こども基本法施行 ユニセフも歓迎

「『こんにちは』って言ったら友だちなんだよ」。あどけない4歳の男の子の言葉です。子どもの権利条約の柱の一つである「子どもの意見表明」と受け止めたくになります。条約が国連で採択されたのは1989年11月。日本が批准したのは1994年4月でした。それから30年、条約の理念を謳った「こども基本法」が今春、ようやく施行されました。ユニセフのキャサリン・ラッセル事務局長は、日本政府に歓迎のメッセージを届けています。（平田篤州）

こどもまんなか社会

〈この法律は、日本国憲法及び児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）の精神にのっとり……〉

こども基本法の第一条の書き出しです。子どもの権利条約の精神に、はっきりとふれています。「基本理念」を書いた第三条には、権利条約の4原則が盛り込まれました。「生命、生存及び発達に対する権利（育つ権利）」「子どもの最善の利益」「子どもの意見の尊重」「差別の禁止」です。そして、第十五条で、こども基本法と子どもの権利条約の周知について、〈国が努めるものとする〉と明確に書かれました。国が、主体的に「子どものアドボカシー（権利擁護）」の周知を前進させていくことを定めたのです。

同時に発足したのが、こども家庭庁。内閣府の外局として子ども政策の司令塔機能を担います。430人体制で、スタート。今後、子どもの意見を直接聞く「こどもまんなかフォーラム」などが開かれます。

国連議場、全会一致で採択

その時、ニューヨークの国連総会の議場は、世界中から集まった子どもたちで埋め尽くされていました。1989年11月20日午前10時、子どもの権利条約が、無投票、全会一致で採択された瞬間です。

一冊の本があります。『国連子どもの権利条約を読む』（岩波ブックレット）。著者は、日本子どもを守る会会長だった大田堯さん（1918-2018）。大田さんは、ブックレットにこう書きました。

〈オードリー・ヘプバーン（1929-93）が、権利条約の母胎となった（子どもの最善の利益にふれた）1959年の国連「子どもの権利宣言」を、美しい英語で、一語一語かみしめるように、はっきりと読み上げました〉

国連の議場で、採択の喜びを子どもたちと分かち合ったヘ

プバーンは、こんな言葉を残しました。

〈子どもより、大切な存在なんてあるかしら〉

デザイナーズジーンズをはいた マザーテレサ

ヘプバーンは、ユニセフ親善大使でした。58歳の時、パートナーから言われました。

「今までの人生（女優）は、この仕事（ユニセフ）ができるかどうかのオーディションだったんだ。そろそろ、正式なものにしたらどうだい」

背中を押されてユニセフ親善大使となり、63歳で亡くなる直前まで、内戦や飢餓に苦しむ世界中の国々を回りました。

いつもメディアを意識しました。どんなに貧しい身なりの子どもたちの中でも、きれいにメイクして「永遠の妖精」を心がけました。そんな彼女を批判する声もありました。でも、彼女は言いました。

「虚栄心と呼びたいければ、どうぞお好きに。ただ、私はカメラ映りが良ければ、それだけ子どもたちの役に立つかもしれないと考えたのです。とにかく、私は世界中の人に『自分以外の人々のこと』を考えてもらいたくて来たのですから、その目的が果たせれば、なんといわれても構いません」

事実、ヘプバーンの行動によって多額の寄付が集まりました。ハリウッドの大女優……広告塔としての役割を存分に自覚していたのです。

〈デザイナーズジーンズをはいたマザーテレサ〉

そんな風にも、呼ばれました。晩年、こう話しています。

「思いがけない贈り物（ユニセフ大使）をもらった気持ちです。自分が有名になったのが、何のためだったのか。いま、やっとわかったからです」

アンネ・フランクとヘプバーン

ヘプバーンは、『アンネの日記』を著したユダヤ系ドイツ

人、アンネ・フランク（1929-45）と同一年です。アンネはナチスの迫害から逃れるため、一家で故国ドイツを離れてオランダのアムステルダムで隠れ家生活へ。2年後、発見されてドイツのベルゲン・ベルゼン強制収容所に移送され、45年3月ごろ、15歳で亡くなります。

一方、ヘプバーンは大戦勃発直前の10歳の時に、ロンドンの寄宿学校からオランダのアーネムへ。ライン川に沿った美しい庭園都市、母親の故郷です。戦時中、バレエの演技を生かしてレジスタンス活動の資金集めをします。家に鍵をかけて、錠戸を閉めて踊りました。拍手喝采は、厳禁です。帽子を静かに回します。募金箱です。直接ではありませんが、オランダの同じ空の下、バレリーナを夢見る少女は「アンネたち」を支援していたのです。

44年、オランダは大飢饉に見舞われます。ヘプバーンは栄養失調になり、終戦になってアムステルダムに移ってからも瀕死の状態でした。そんな少女の回復を助けたのが、ユニセフの前身の連合国救済復興機関（UNRRA）でした。ヘプバーンはのちに、こう振り返っています。

「ユニセフが子どもにとってどんな存在なのか、私は、はっきり証言できます。なぜなら、私自身が、ユニセフから食べ物や医療の支援を受けた子どもの1人だったのですから……」

大戦の猛省、核、地球環境

大田さんは、子どもの権利条約を読み解くためには、〈戦争と平和〉〈地球環境〉へのまなざしが不可欠だと指摘します。

子どもの権利条約のルーツは、国際連盟で1924年に採択された「子どもの権利に関するジュネーヴ宣言」です。ジュネーヴ宣言は、「児童は危難の際には、最初に救済を受ける

者でなければならない」と、第一次世界大戦（1914-18）で戦禍にさらされた子どもたちの保護を謳いました。子どもたちに、「大戦」という「最悪のもの」を与えたことへの猛省から宣言が生まれたのです。

ところが宣言から15年後の1939年9月1日、第二次世界大戦が勃発します。再び、大人は子どもたちに「最悪のもの」を与えてしまうのです。広島、長崎への悪夢の原爆投下を経て終戦。世界は、大いに悔い改めます。48年に「世界人権宣言」を採択し、59年の「子どもの権利宣言」を生み出します。そして、89年の子どもの権利条約に昇華していったのです。

大田さんは、何よりも核の存在を危惧しました。温暖化や砂漠化などをあげ、放射能汚染、環境汚染という熨斗をつけて、地球を子どもたちに渡すのか。なんとという大人の身勝手か、と訴えたのです。

ヘプバーンも、最晩年に「ユニセフが取り組むべき最大の問題をひとつあげるとすれば」と問われて、ただ一言で応じました。

「戦争」

冒頭の『『こんにちは』って言ったら、友だちなんだよ』という4歳児の声は、ある市報の〈天使のつぶやき〉という欄に載っていました。

彼の国の大統領は、どう受け止めるのでしょうか。

※ 文中のヘプバーンの言葉は、主に『オードリー・ヘップバーンの言葉』（山口路子著、大和書房刊）から引用しました。



子どもの権利条約が採択された時の様子。採択についてジュネーブの国連オフィスに報告するボーイスカウトの男の子たちと、ユニセフ事務局長ジェームス・グラント（左）、ユニセフ親善大使オードリー・ヘップバーン

©UNICEF/UN0279229/john Isaac/UN photo